

● シリーズ 私の見た日本 Vol.247

日常の中に残る時間 東京で感じた古い建築との距離感

丁 裕恒(テイ ユウコウ)

中国・河南省生まれ。2026年東京電機大学大学院未来科学研究科建築学専攻修了。



私は、中国河南省の歴史都市・開封で生まれ育った。開封は、かつて北宋の都として栄えた街であり、現在でも歴史的な建築や街並みを見ることが出来る。街の中には、歴史的景観を再現した空間も多く存在しており、多くの人々がその雰囲気を楽しんでいる。

夜になると、川沿いの建物や橋には灯りがともり、水面にはその光が映り込む。観光客で賑わう通りを歩いていると、まるで過去の時代の中に入り込んだような感覚になることもあった。建築だけではなく、街全体の景観や空気感によって、「歴史を体験する空間」がつくられているように思う。

また、開封では歴史的な建物そのものだけではなく、街路の構成や屋台の並び方、人々の活動も含めて、一つの歴史的景観として整えられているように感じるがあった。私は幼い頃からそのような風景を見て育ったため、「歴史」とは、ある程度特別な場所として保存され、人々が訪れ、鑑賞し、体験するものだと思っていた。

日本で生活を始めてから、私は歴史との別の距離感を知ることになった。最初に強く印象に残ったのは、東京の住宅街を歩いていた時のことで

ある。高層ビルが立ち並び駅前から少し離れたと、静かな住宅地の中に小さな神社が突然現れる。その隣には古い木造住宅があり、向かいには新しいマンションやコンビニが建っている。その新旧が混在する風景を不思議に感じた。開封では、歴史的景観は比較的大きなエリアとして整備され、「歴史を感じる場所」として存在していることが多い。しかし東京では、古い建築が日常の風景の中に自然に入り込んでいる。私はその距離感の近さに驚いた。

それらが単に“残されている”のではなく、“使われ続けている”ということである。古い木造住宅には今でも人が暮らしており、昔ながらの商店街では地域の人々が日常的に買い物をしている。神社もまた、観光地というより、地域の日常の延長線上に存在しているように感じられた。朝、通学の途中に神社の前を通ると、近所の人々が静かに手を合わせていることがある。また、夕方になると、学校帰りの子どもたちが境内を通り抜けていく姿も見かける。そこには、観光地のような特別な空気ではなく、地域の日常の風景があった。その光景を見ながら、日本では歴史的な場所が「過去のもの」として存在しているのではなく、「今も人々の生活の中にある空

間」として存在しているのだと感じた。また、日本では古い建物の周囲にも、人々の生活の痕跡が自然に残されていることに気づいた。古い住宅の前には自転車や植木鉢が置かれ、商店街の軒先には手書きの張り紙が貼られている。そうした小さな風景を見るたびに、古い建築が単なる保存対象ではなく、現在の生活と結びついていることを感じる。

さらに興味深かったのは、日本の古い建築には、長い時間の痕跡がそのまま残されていることである。例えば、木造建築の柱に残る細かな傷、長年使われたことで少し色が変わった床、何度も踏まれて角が丸くなった石段など、それらを見てみると、その建物が本当に長い時間を生きてきたことを感じる。日本に来たばかりの頃、私は古い建物を見る時、まず外観の美しさやデザインに目が向いていた。生活を続ける中で、少しずつ建物の“時間”を見るようになった。木材の表面の変化や、手で触られてきた跡、長年使われて少し歪んだ建具など、そうした細かな部分から、人と建築の長い関係を感じられた。また、日本の古い建築では、完全に新しい状態に戻そうとするのではなく、古くなった部分を受

け入れながら使い続けているようにも感じる。少し色褪せた木材や、経年変化した外壁には、新築にはない落ち着きがあり、そこにしかない空気が生まれているように思う。

それらは単なる「古い建築」ではなく、「時間そのもの」のように思えた。特に東京では、巨大都市でありながら、そうした時間の痕跡を感じる瞬間が多く存在している。例えば、東京駅周辺には現代的な高層ビルが立ち並んでいる。しかし、その中心には赤レンガの東京駅舎が今も存在している。高層ビルのガラスに囲まれながらも、そこだけ異なる時間が静かに残っているように感じられる。

また、東京では古い建物と新しい建物が、必ずしも統一された景観の中に存在しているわけではない。高層ビルの隣に小さな神社があり、古い木造住宅の近くにコンビニがある。細い路地の上には電線が広がり、その奥に古い店が静かに残っている。最初は少し雑然としているようにも感じたが東京で生活するうちに、私はその“不統一さ”こそが、この都市の特徴なのではないかと思うようになった。すべてが一度に計画された都市ではなく、小さな更新を繰り返しながら、長い時間をかけて変化し続けている都市な

のではないだろうか。

古い建物が残る場所に新しい建物が建ち、さらにその横でまた別の時間が積み重なっていく。その結果として、東京にはさまざまな時間が同時に存在している。私はその風景に、「実際に人が生活している都市」のリアリティを感じる。日本では古い建築に新しい用途を与えながら使い続ける例も多い。古民家を改修したカフェや、古い建物を利用した小さな店舗など、過去の建築を完全に壊すのではなく、新しい機能を与えながら使い続けている。私は初めて古民家を改修したカフェを訪れた時、とても印象に残ったことがある。古い梁や柱が残された空間の中で、人々が自然に会話をし、食事をしていた。その空間には、単に新しい建物では感じられない落ち着きがあり、過去の時間が現在の生活と静かにつながっているように感じられた。その空間では、過去の時間が現在の暮らしの中に自然に溶け込んでいた。

私は建築を学ぶ中で、建築とは新しいものをつくるだけではなく、時間を受け継いでいくものでもあるのだと考えるようになった。もちろん都市は変化し続けるし、新しい建築も必要であ

る。その一方で、古い建築が現在の生活の中心に残り続けることで、その都市にしかない時間の層や記憶が生まれていくのではないかと思う。以前の私は、歴史的建築を保存するとは、できるだけ昔の姿を残すことだと思っていた。しかし今は、建物を単に保存するだけではなく、現在の生活の中で使い続けることも、とても重要なのではないかと思うようになった。もちろん、どちらの方法が正しいというわけではない。歴史的景観を整備することで、多くの人々が歴史に興味を持つきっかけになることもある。実際、故郷である開封の街並みには、今でも特別な魅力があると感じている。

しかし日本で生活する中で、私は「歴史は特別な場所に存在するだけではなく、日常の中に自然に残り続けることもできる」ということを知り、今では古い建物を見る時、その建物がどれだけ美しいかだけではなく、「今も誰かの生活の中に存在しているか」を意識するようになった。

日本で生活した経験は、私の建築や都市を見る視点を少し変えたように思う。



歴史的景観を再現した夜の街並み(中国・開封市)



日常の中に自然に残る神



日常の中で使われ続ける木造建築



新旧の建物が共存する街並み